

ウィニフレッド・ワトソン作  
最所篤子訳

## ミス・ペティグールの素敵な一日

Miss Pettigrew Lives for a Day, by Winifred Watson, Translated by Atsuko Saisho

午後七時二五分 午後八時二八分

「ハ！」大きな、男っぽい声が響き渡ります。「彼女は留守だって言うなよ、信じないからな」

「お入りください」とミス・ペティグールは胸を高鳴らせて言いました。

訪問者は部屋の中に入らずかかと入ってきました。背が高い男性で、夜会服を着ています。黒の上着は前がはだけ、シルクハットは傾き、白いマフラーがひらひらしています。堂々たる体格、いかつい顔立ち、喧嘩っ早そうな顎、射抜くような目、怒りに燃えた表情。まあ、ヘラクレスみたい。いえ、クラーク・ゲートルそっくりだわ！



島田圭子画

帽子を放り、マフラーを乱暴にはずし、手袋を床に投げつけ、怖い目で部屋を見渡しました。そのぞくつとするような、鋭く相手を射すくめる眼差しは昔ながらの強いヒーローそのものですが、彼はヒーローみたいに黙ってはいませんでした。その目がミス・ラフォースをとらえます。

「この魔女め」怒りに燃えています。「とつとつつかまえたぞ」

「まあどうしましょう！」ミス・ラフォースが言いました。

ミス・ラフォースは挨拶をしに立ち上がろうともしませんでした。ただただ驚き、シヨックのあまり、椅子から動けなくなってしまうたようです。それともこわがってらっしゃるのかしら。とにかく、何か激しい感情だわ、とミス・ペティグルーは分析しました。ところが、激しい感情といったら、今のミス・ペティグルーにとっては大歓迎の代物です。嬉しくてしかたありません。ミス・ラフォースと、飛びかかりそうにしているお客様の間に割って入ろうと身構えます。ところがお客様はミス・ペティグルーなんかそこにいないみたいになんと通り過ぎ、ミス・ラフォースにのしかかりました。

「それで？ 何か言い分があるなら言ってみろ」

「言い訳のしようがないわ」ミス・ラフォースは声を震わせました。「ほんとに弁解の余地なしよ」

「素直でよろしい」ぞんざいに答えます。「胃もたれだったなんて言っても聞く耳もたんからな」

「胃もたれなんてなったことないわ」とミス・ラフォースがぶんぶんして言いました。

「あたし、ぜったいに食べ過ぎたりしないもの。スタイルを大事にしなくちゃいけないんだから」

「立つんだ」

ミス・ラフォースは目にほつとした微笑みをちらりと浮かべて、素直に立ち上がりました。ところがミス・ラフォース本人も、ミス・ペティグルーもびっくり仰天したことに、怒りにかられた青年はミス・ラフォースの両肩をつかむと、たいへんな勢いで揺すり始めたのです。

ミス・ペティグルーは抗議の声をあげて進み出ましたが、と、そこで足がぴたりと止まってしまいました。どうしたことでしょう。目の前で見知らぬ青年が大事なお友達にひどいことをしているというのに、まるでかかしのように突っ立って、なんにもしないなんて。おまけになんとかしたくもないなんて。ミス・ペティグルーは我ながら啞然としてしまいました。でも、急に、この立派な若者が信頼できるような気がしてきたのです。この人はミス・ラフォースを本当に傷つけたりはしないでしょうし、ミス・ラフォースのほうは、たぶん罰を受けるだけのことをしたのじゃないでしょうか。そうだわ。心の中でうなずきます。お腹の底で、ミス・ペティグルーは率直に本音を白状してしまいました。ミス・ラフォースのことは大好きでしたが、正直なところ、このお友達が正義の鞭を受けて当然のことをやりかねないだろうと認めないわけにはいきません。ミ

ス・ペティグルーの脳みそは、この一日の冒険で磨きがかかり、すばらしい判断力を発揮しました。一瞬のうちに得心したのです。聞こえてきた会話の端々から、ミス・ペティグルーはあつという間に、ミス・ラフォースがこの青年を怒らせるだけのことをして、しかもその言い訳もできないことがわかりました。本人がそう言っているんですから、罰を受けるのは当然なのです。大人になってからというもの、ずっと子供たちの面倒を見てきた身としては、それに、結局のところミス・ラフォースという人は大きな子供なんですから、ちょっとした必要な罰を認めるのはやさかではありません。様子を見たほうがいいわ。本当に必要になれば、割ってはいる時間はたっぷりあります。まずは、どついうことなのか事態をちゃんと把握しなくては。

青年はミス・ラフォースを揺さぶるのをやめました。

「三〇日間、ずっとこうするのを待っていたんだ。さあ、言いたいことはあるか？」

「あたし……そうされて当然だわ」ミス・ラフォースは息も絶え絶えに、でも驚くほど大人しく言いました。

彼は険しい目を向けました。

「なるほど、その手できたか。俺を言いくるめようたって無駄だぞ」

「違うわ……違うわ！」ミス・ラフォースは慌てて言いました。

彼は手を離します。

「無理なんだよ……今度ばかりは」

「言いくるめようなんてしてないわ」ミス・ラフォースは下手に出ました。

彼が一步下がります。

「ああ、そうするつもりだったさ、もちろん。だがもうその手は通用しないんだ。俺をこけにするのはこれ限りだ」

「ねえ、お願い」ミス・ラフォースはおろおろと仰いました。「そんなこと言わないで。

好きなようにしていいから。ね、もう一回、揺さぶってちょうだい」

「もう一回、揺さぶりたくなんかないぞ」

ほっとした微笑みがミス・ラフォースの困った顔に浮かびました。

「ああよかった。本当は揺さぶられるのって好きじゃないの」「甘ったるい笑顔になります。」「じゃあ、「これで一件落着なんだから、キスしてくれるわね？」」

「そうはいかないよ、お嬢さん。もうキスするつもりはない」

ミス・ラフォースはさつと顔を上げ、びっくりした眼差しを彼に向けました。その無言の問いかけに、彼は怖い声で答えます。

「そうだ、もう終わりなんだ」

「でも……」ミス・ラフォースが口を開きます。

「でもはもうなしだ。言い逃れも、言い訳も。もううんざりだ。一度は俺をだませるかもしれないが、二度は無理だ。そんなこと、どんな男にだってさせない……いや、女だ

って」

「まあ！」ミス・ラフォースがささやきました。

「君に教えてやっているんだ。俺は君にべたばれた。それを君も分かってる。だが俺にも限界があるんだよ。君はそれを踏み越えちゃった。最後の最後で俺の気持ちをもてあそんだんだぞ。君が真剣になるか……俺があきらめるかだ」

その言葉は断固としたものでした。ミス・ペティグルーは彼が本気だと言つことが分かりました。ミス・ラフォースも彼が本気だと思つているのが感じられます。顔から少し血の気が引いています。ミス・ペティグルーは近づいて腰掛けました。心臓が興奮でドキドキしています。新しい事態にすっかり幻惑されていますが、それでも感覚を研ぎ澄まして、必要なら二人の間に割って入り、力の許す限りミス・ラフォースを救い出すつもりでいます。

「おい」とお客様は厳しい声で言いました。「俺は説明を待つてるんだが」

ミス・ラフォースは椅子にくたくたと座り込みました。

「ああ！」ミス・ラフォースは嘆きます。「最低」

「そりやどつも」と青年が言います。「君は俺をそう思つてるのか」

腹立ちまぎれに手を髪につっこみます。とても美しい、豊かな髪で、まさに流行そのものの髪型に後ろになでつけられています。金髪でも、黒髪でもありません。ちょうどいい、中間の色合いで、いかにも男らしいけれど、ブロードのヒーローでも浅黒い悪党でもありません。彼は、本当に若いわけではありませんでした。二〇代ではなく、たぶん三〇代の初めでしょう。でも四〇前の男性はみんな、ミス・ペティグルーにとっては若者なのです。

「ね、お願い」ミス・ラフォースが懇願します。「そんなんじゃないの。ただ、最後の瞬間になったら、あたしには無理って思ってしまったのよ。ああ、うまく説明できないわ。本当に、本当にごめんなさい。あなたが帰ってくるのが怖かったのよ」

「それはそつだろつ」と彼は落ち着いて答えました。「男の気持ちをわざとあおり立てて、世界のとっぺんに立ったような気分にさせておいてから、気が変わったといつて希望を一瞬で打ちのめす。あまり褒められた行動ではないぞ。もし君がうんと言つたのであれば……だがそう言つたんだからな。そこは大きな違いなんだ」

ミス・ラフォースはもう一度、すぎるような目を向けました。突然、少し泣き出ししました。お客様は顔をしかめると、ミス・ラフォースをとらえ、腕に抱くとキスしました。それは魔法のような効き目を発揮して、ミス・ラフォースは涙ながらにっこりしました。

「あなたを傷つけるつもりはなかったの」あえぐように言いました。「あなたがそんな……そんなふうを感じるなんて思わなくて」

「目玉を赤くするのを止める。じゃないとあとで俺に文句を言つんだからな」彼は命令するようには言いました。「どつせ効果を狙つてやつてることはわかつてるんだ。困つた

ことに、その効果は男の純情には効き目抜群ときたもんだ。もう怒鳴らないよ。だが君を罰したことは後悔してないぞ。同じことがあつたらまたやってやる。だが、同じことが二度とあると思うな。そのことをしっかり頭にに入れておけ」

最後のところで、彼の声はまた少し、強い調子になりました。ミス・ラフォースは彼を見ました。彼もミス・ラフォースを見ました。身をかがめると、もう一度キスし、それから彼女を立ちあがらせませす。しかめつらで少しの間、その姿を眺めた後、振り返ってミス・ペティグルーに笑いかけました。

「はじめまして。いざござをお見せして失礼」

「どういたしまして」とミス・ペティグルーが言いました。

「デリシアは観客がいるのが嬉しいんだ。見られるのに慣れてるからね。泣いたのも、あんたに俺をけだものだと思わせるためなんだ」

「まあ、そんな」とミス・ペティグルーはミス・ラフォースへの忠誠心と、この変わった青年への同情の板ばさみになって、おたおたしてしまいました。

「俺はけだものみたいに見える？」

「いいえ」とミス・ペティグルー。

「じゃあ人食い人種かな？」

「いいえ」とミス・ペティグルーは息をのみました。

「それなら暴力亭主に見える？」

「とんでもない」とミス・ペティグルーは憤然と言いました。

「ほら見る」と彼は勝ち誇つたように言いました。「男に他に何を望むって言うんだ？ けだものでもなく、人食い人種でもなく、暴力亭主でもない。君と同じ女性がそう断言してるんだぞ。くそ、俺は君にはもつたないぜ」

ミス・ラフォースはくすくすと笑い始めました。笑わずに入られなかったのです。ミス・ペティグルーは座りなおしました。なんだか楽しくなってきました。大柄な彼の笑顔はびつくりするほど魅力的です。

「まあ、やめてよ」とミス・ラフォースが笑います。「ふざけないで」

「無礼だな」とお客様は怒つたようにいいます。「それは感謝が足りないぞ。そんなじゃ元氣付けがあるよ。酒が飲みたい。おい、もてなしの精神はどこにいったんだ？ 女主人の鑑だろ？ お客の気持ちを察する、あの感心な才能はどこにいつちゃったんだ？」

「キッチンにいつぱいあるわ」とミス・ラフォース。

「あたくしが参りましょう」とミス・ペティグルーが申し出ました。

「だめだめ、そんなことしちゃ。俺だってボトルくらい運べるんだから」そう言つて彼はテーブルにぶつかりました。「おい、デリシア。いったいどいつがこの部屋の飾りつけをやったんだ？ 『コーラスガール、公爵夫人になる』の誘惑の場面みたいじゃない

か」

「まあ、おあいにくさま」とミス・ラフォースが怒って言いました。「あたしが自分で選んだのよ」

「嘆かわしい趣味だな」

彼はキッチンに飛び込みました。キッチンの中でどすどすと歩き回り、椅子やテーブルをがたがたさせ、食器棚の扉を大きな音を立てて開け閉めし、お盆に力チャカチャ音をさせてグラスを載せています。

「とても騒々しいお方ですわね」とミス・ペティグルーはにこにこして言いました。

「まさに、その通り」とミス・ラフォースはうなずきました。

突然、怒りの叫び声がキッチンに響きました。

「まあ！」とミス・ペティグルー。

「あら！」とミス・ラフォース。

彼の怒った顔が入り口からのぞきます。

「おいこら、お前！」と吠えます。「何度言ったら分かるんだ？ ウイスキー、ウ・イ・ス・キーこそ男の飲みものなんだぞ？ ラムはある。ポートはある、シエリーもある、あのまじいジンまであるっていうのに、ウイスキーが一滴もない。しっかりしてくれよ。お客への気遣いはどうなっちゃったんだ？」

「まあどうしましょう！」とミス・ラフォースは弱々しく言いました。「あるものじゃだめ？」

「だめだ。今、俺が飲みたいのは酒なんだ。今、酒が必要なんだ。今、飲まなきゃだめなんだ。下のポーターはなかなか気のきいた顔をしてたな。ちょっと行ってくるよ」

「あれまあ」とミス・ペティグルーは震え声を出しました。

「あれが」とミス・ラフォースがそつと言いました。「マイケルよ」

「マイケル？」ミス・ペティグルーがあえぎ声を出しました。

「マイケルよ」

「まあ……まあまああ！」とミス・ペティグルーはへたへたとりました。

そして手探りで椅子を見つけるとへたりこみました。頭の中を整理するのにたつぷり一分間、かかりました。まずマイケルに対する先入観を払いのけます。それから生身のマイケルに合わせて、心のピントを合わせて修正します。目がきらきらしてきました。顔がピンク色に火照り、身体が嬉しさに震えてきます。椅子に座りなおすと、目を輝かせてミス・ラフォースを見つめました。

「まああなた！」ミス・ペティグルーは喜び一杯に言いました。「おめでとつと申し上げますわ！」

「え？」とミス・ラフォース。「なにが？」

ミス・ペティグルーはそれくらいではへこたれません。いまや、彼女はマイケルの熱烈な味方でした。ロマンティックな理想を抱いた中年のオールドミスほど強力な味方が

いつたどこにいるでしょう？

「あと二〇歳若かったら」とミス・ペティグルーは顔を輝かせて言いました。「それにそうできたらの話ですけど、あの方を盗んでしまいますわ」

「本当？」ミス・ラフォースは興味を引かれて聞きました。

「あたくし心配しておりましたの」とミス・ペティグルーは嬉しそうに言いました。「黙って心配しておりましたの。表には出しませんでしたけれど。でも心配はもつなくなりました。すっかり安心しましたわ」

「でもマイケルのこと嫌いだったんじゃない？」とミス・ラフォース。「前、話したときの感じだと、ぜったい嫌いみたいだったわ」

「そのときはまだお目にかかってませんでしたから」とミス・ペティグルーは謝りました。「先入観にとらわれすぎるのがどんなに悪いことか、これで証明されましたわね」

「じゃあ、あなたは……マイケルがいつて言うの？」とミス・ラフォースはびつくりして聞きました。

「あなたには……まさにびつたりですよ」とミス・ペティグルーは断言しました。

心配事は全部、霧のように消えました。ミス・ラフォースの将来は安泰です。マイケルと一緒になら、人生が退屈だったり、見通しが立たなかったり、欲求不満だったりすることはあるはずがありません。心配したのが馬鹿みたい。彼こそ完璧な夫です。ミス・ラフォースはマイケルと結婚すれば、彼女にふさわしい、ゴージャスで変化に富んだ人生を続けられるでしょう。あんな青年と月並みな生活が同居するなんて想像もできません。これで万事めでたしです。心にのしかかっていた重荷がすつと取れました。

「白のベルベットとパール、それにオレンジの花ですわ」とミス・ペティグルーはうつとります。「ねえあなた、お知りあいになったばかりで厚かましいとは思いますが、もし日取りだけでも教えてくださったら、何をしておいても教会に参りとうございませわ」  
「まあ、グウィネヴィア！」ミス・ラフォースがクスクス笑います。「そんなに慌てないで」

そして真面目な顔になりました。袖のリボンをいじります。

「そんなに簡単にはいかないのよ」

「どうしてですか？」ミス・ペティグルーは勇敢に訊ねました。「マイケルさんはあなたとご結婚なさりたいんでしょう？」

「前はね」とミス・ラフォースはあやふやに答えました。

「前は！」ミス・ペティグルーはがっかりしました。「でも結婚したがってるっておっしゃったじゃありませんの」

「あの時は彼が帰ってくる前だったもの」

「それとどう関係あるんですの？」

「だからね、彼がどんな人が分かったでしょ？」

「ええ」とミス・ペティグルー。「何かにちよつと腹を立てていらつしやうたようです」

わね」

「すっごく腹を立ててたと思うわ」とミス・ラフォース。

「もし……もし、あたくしで何かお役に立てるなら」とミス・ペティグルーは必死に言いました。

「すごく複雑なの」とミス・ラフォース。

「またですよ」とミス・ペティグルー。

「あんまり聞いて楽しい話じゃないわ」

「あたくしなら大丈夫」

「それじゃ」とミス・ラフォースはため息をつきました。「マイケルが帰ってくる前に説明したほうがいいわね。マイケルはあたしと結婚したかったの。もうずっとやいやいうるさかったのよ。それでね、マイケルと結婚すれば、ニックからは安全になるってふつと思っちゃったのよね。それで、うんと言っちゃったの。彼、特別な結婚許可証をとってきて、あたしたち、すぐに登記所で結婚しちゃうことになったの。そしたらその朝ニックが現れて……それで……あたし、すっぱかしちゃったのよ。マイケルは大酒を飲んで、酔っ払って騒いでね、つかまえに来たおまわりさんを一発ぶんなくっちゃったの。それで30日食らったのよ。問答無用でね。出てくる前に頭が冷えるかと思っただけど、冷えてないみたいね」

「大酒！」ミス・ペティグルーはか細い声で言いました。「一発ぶんなくった!」

興奮で目が回りそうです。ミス・ラフォースの話を生懸命に聞いていたおかげで、その情景をはつきり描くことができました。胸やぶれたマイケルは、失望のあまり外に出て、大酒を飲み、警官を殴ったのです。彼は前科者で、酔っ払いで、英国の法律のもとで最も凶悪な罪を犯した人間です。職務遂行中の警官に暴力を振るったのですから。獄につながれた事実は一生涯ついて回る烙印です。マイケルはあつという間にミス・ペティグルーの何より軽蔑する人間の仲間入りをしてしまっただけではありません。が、そうでしょうか? いいえ違います。ミス・ペティグルーのマイケルに対する評価は口ケツト並に天高く舞い上がりました。彼のことを考えただけでぞくぞくします。男の中の男じゃありませんか。ありったけの同情心がマイケルに注がれます。愛のために犯した愚かな過ちを許さない人なんているでしょうか? いくらミス・ラフォースだって、こんなに力強く彼の傷心の深さが証明されれば心を動かされるに違いありません。ミス・ペティグルーはぶるぶる身を震わせながら、ミス・ラフォースに期待に満ちた眼差しを向けました。

「彼の言ったとおりなの」ミス・ラフォースが続けます。「怖気づいたふりをしただけだったのよ。本当はそっじゃなかった。もしニックがいなければ、きっとマイケルと結婚すると思っ……でも分からないけど」と声が暗くなります。「いろいろ考えなくちゃいけないことがあるし。だって考えてみたら……」

「でも、今なら!」ミス・ペティグルーは息を切らせてさえぎりました。「今だったら

……つまり、同じ日に二人にお会いになったじゃありませんの……ちゃんとご覧になったら比べようもありませんでしょ……もちろん」

ミス・ラフォースは立ち上がりました。頭をマントルピースにもたせかけます。

「あなた分かってないのよ」くぐもった声で言います。「あたし、まだニックのこと思っているんだもの」

ミス・ペティグルーは口がきけませんでした。いくらニックが素敵だからと言って、いったいどの誰がマイケルよりニックのほうがいいなんて思うのでしょうか？一方は黄金、もう一方はただのメッキです。でも、一度に三人も恋人を持っている若いお嬢さんに向かって忠告なんてできる柄でしょうか？何しろ生まれてからたった一人だつて恋人を持つたことがないのです。それでもミス・ペティグルーは勇気を奮い起こしました。

「でも、お願いですからミス・ラフォース」と声をあげました。「どうか、どうか考えてくださいまし。マイケルさんは立派な方ですわ。ニックはただの……疫病神じゃありませんの」

「仕方ないのよ」とミス・ラフォースは絶望的に言いました。「それ、あたしが自分で前に言ったんじゃないか？」

「マイケルさんはニックのことをご存知なの？」とミス・ペティグルーは悲しそうに聞きました。

「あたしたちが親しいことは知ってるわ」とミス・ラフォースは用心深く答えました。

「でも、そつね、これほど親しいとは知らないわね」

「それはよごさんした」とミス・ペティグルー。

「眼に映らないものは……」とミス・ラフォースはもったいぶって言いました。

「確かに」ミス・ペティグルーはこれまでの道徳観念をすっかり忘れてうっかりと口走りました。

「今度こそ」とミス・ラフォースは暗い顔をしました。「マイケルにさよならをしなくちゃいけないと思うのよ」

「まあ、そんなこと！」ミス・ペティグルーは泣き出さんばかりです。

「でも分かるでしょ」ミス・ラフォースはただ言いました。「あたし、一度だつてマイケルのことを誤解したりしてないわ。彼はそつ思ってるけど。ずつと、いつか彼が『終わりだ』って言い出すだろつと思っていたの。イエスカノーか答えなくちゃいけないらつてね。そのときが来たんだわ。あなたも聞いたでしょ。彼、本気よ。マイケルはそういう人だもの。ああ、あたし困った女よね。彼に離れていつて欲しくないの」

「ああどうか！」ミス・ペティグルーは必死になります。「イエスっておっしゃれないんですの？ そつ言ってしまうばきつと後悔なさいませんわ」

「さあねえ」とミス・ラフォースはまた陰鬱な声を出しました。「だつて……」

マイケルがまたドアをドンドンと叩きました。ミス・ラフォースの「だつて」の続き

はそのままになってしまいました。あわてて鼻に白粉をはたきます。ミス・ペティグールがドアを開けました。

「ぼつちりだ」とマイケル。「あいつはちょっと気がきいてそうだって言ったろ？　こういうことにはコツがあるんだ。少々の説得と、少々の鼻薬で、あっという間に用は足りるのさ」

ウイスキーの瓶をドスンとテーブルに置きます。ミス・ラフォースがコルク抜きを出しました。ミス・ペティグールがグラスを運びます。

「注ぐぞ。ちよつどいいところで言ってくれ」とマイケル。

「それでいいわ」とミス・ラフォース。

「ソーダは？」

「いらぬわ」

「やるね」

ミス・ペティグールは冒険に備えて待ち構えていました。

「どれくらい？」

「これくらい」ミス・ペティグールはあえぐように言いました。

「なんだ、こんなぼつちり！」マイケルが非難します。

「押し付けないで」とミス・ラフォース。「ゲウイネヴィアはレディなんだから。あなたとは違つたよ。彼女は酔っ払って警官をなぐって歩いたりしないの。ソーダを入れてあげて」

「あたくし、一度ウイスキーを味見してみたかったですの」とミス・ペティグールが嬉しそうに言いました。「一度も飲んだことがありませんのよ。風邪をひいたときのお薬の代わりにも」

「いったいどこで育つたんだ？」とマイケルは気の毒そうに言いました。

「ゆつくりするのよ」とミス・ラフォース。

「ぐいっといけ」とマイケル。

ミス・ペティグールは一口、すすりました。顔をしかめます。こつそりとグラスをテーブルにおきました。

（変な味！）ミス・ペティグールはがっかりしました。（人が言うほどのものじゃないわ。どつして男性はこんなもので酔っ払うのにお金を払うのかしら。レモンスカッシュみたいにとつてもお安くておいしい飲み物があるって言つのに……！）

「これでましな気分になった」とマイケル。

空のグラスをテーブルに置きましたが、ミス・ペティグールのいっばいに入ったグラスは見ないふりをします。

「もう一杯どう」とミス・ラフォース。「あと二杯くらい」

マイケルは考え深そうな顔を向けました。

「俺を酔わせてもな、お嬢さん。俺の君に対する気持ちは変わらないぞ。酔いは最後に

は醒めるんだからな」

「それでどうにかなるとは思わなかったけど」とミス・ラフォースはため息をつきます。

「でも、やるだけやってみてもいいでしょ」

「まあ、やめておけよ。無駄だから」とマイケルは落ち着いて言いました。「さて、男らしい気分に戻ったところで、本題に戻るとするか。答えはどっちだ、イエスかノーか？」

ミス・ラフォースから少し血の気がひきました。立ったまま彼を見つめ返します。マイケルは落ち着き払ってその顔を見続けます。ミス・ラフォースは不安げに視線を落としました。マイケルは手をポケットに突っ込み、煙草入れを出すと煙草に火をつけて、そこに立って待っています。吐き出した煙の長いらせんが宙に消えます。

「目には涙」とマイケル。「美しく乱れた巻き毛、ドレスの胸をほんの少し引つ張りおろし、唇を切なげにふるわせ、子供みたいに訴えるような顔をしてみせたって、何の効き目もないぞ」

ミス・ペティグルーは心臓がぎゅっと縮まるのを感じました。ミス・ラフォースは椅子の背中につかまります。

「これで」とマイケルは優しく言いました。「聞くのは最後だ」

ミス・ラフォースは絶望的な眼差しをミス・ペティグルーに投げかけました。ミス・ペティグルーは震えながら深く息を吸い込みました。

「ねえ思いませんこと」とミス・ペティグルー。絶妙な口調です。相手をなだめるのもなく、訴えるのもなく、説得するのでもなく、どっちの味方でもないあたりまえの会話をするような響き。脇で眺めている人が単なる第三者的な関心を向けただけ、という調子です。「そういう重要な質問には少し猶予が与えられるべきじゃないかしら？ 最後通牒というのは期限があるものですわ。女性の頭というのは、男性と違ってすばやく物事を決められるようにはできてませんのよ。早く決断すると後で取り消しになることが多いのですわ。女には男性のプライドなんてありませんから、口にしたことを守り抜くなんてことはしませんの。大事なことを決めるには女性は時間があるんですよ」

マイケルは胸いっぱい煙を吸い込み、鋭い息とともに吐き出しました。

「ハ！ あんたの言うとおりかもしれんな。最後通牒には警告が与えられるのが普通だ。いつでも彼女の思い通りになると、思い込ませちまったのは俺かもしれん。フェアに行くなら、通知してから態度を変えるべきだな。一週間だ。一週間あれば俺は自分のいいところを全部見せる時間があるし、たぶん、彼女にまともな決心をするよう仕向けられるだろう」

ミス・ペティグルーは深い息を音もなく吐き出しました。ミス・ラフォースは困り果てた顔からたちまち朗らかな表情に変わります。

マイケルは突然振り返ると、厳しい目をミス・ペティグルーに据えました。

「あんたは頭がいい女らしい。こっちを見て」

ミス・ペティグルーは物怖じせず、マイケルを見ました。

「俺は冷静に見えるか？」マイケルは聞きました。「落ち着いた、正直者に見えるか？」  
「まあどうしましょう！」とミス・ペティグルーは慌てました。「お答えしなくては  
けませんの？」

「ああ」

「まあ困ったわ……そうですわね。冷静ではありませんわ」とミス・ペティグルーは正  
直に言いました。「落ち着いていませんけど……でも正直です」

「なんだって？」マイケルは驚きます。にやつと笑いました。「あんた、なかなかの人  
物だな」

彼はミス・ペティグルーに並んでソファに腰掛けました。ミス・ペティグルーは胸を  
ときめかせます。

「俺と結婚したら彼女は不幸になると思っかい？」とマイケル。

「ミス・ラフォースにとつてなにより一番いいことですわ」とミス・ペティグルーはき  
っぱりといました。

マイケルは嬉しそうな笑顔になりました。

「鋭い目をしてるじゃないか」と満足げです。「あんたと俺は友達だ。あんたは頭がい  
いって言わなかつたっけ？」

「おっしゃいましたわ」とミス・ペティグルー。

「なんとか彼女の馬鹿げた大間違いを直してやれるかい？」

「それは無理ですわ」ミス・ペティグルーは情けない顔をします。

「だろっね。いいアドバイスとなると、てんで耳を貸さない女だからな」

「あら、でもとつても優しい方ですわ」とミス・ペティグルーは肩を持ちます。

「とんでもなくいらつく小娘さ」

「でもとつてもおきれいですわ」とミス・ペティグルーがかばいます。

「ああ、腹の立つことにな！だがねずみ並みの脳みそもない」

「でも脳みそはいりますかしら？」とミス・ペティグルーは一生懸命です。

「ちよっぴり灰色の脳細胞があつたつて悪くはないだろっ」

「でも、あたくし、男性は頭のいい女性はお嫌いなのかと思つてましたけど」

「俺は好きだよ。だから俺は普通の男とは違つんだ。それなのにいったいなんで彼女に  
ほれたんだかさっぱりわからん」

「でも本当は頭のいい方ですわ」とミス・ペティグルーは熱をこめて言いました。

「それじゃどうして頭を使わないんだ？」

「さあ」ため息をつきます。

「頭がないからさ」

「もしもし、あたしもここにいるのよ」とミス・ラフォースは可愛らしい笑いの混じつ  
た声で言いました。

「黙ってる」とマイケル。「大事な話をしてるんだ。愚か者は口をはさまなくていい」「ごめんなさい」とミス・ラフォースはすこすこと引き下がります。

「よし」

マイケルはまたミス・ペティグルーの方を向きました。

「俺たち二人はものごとが分かってる」

「だとよろしいんですけど」とミス・ペティグルーは弱々しく言いました。

「俺はずいぶんいろんな女とつきあってきた」

「まあ！」とミス・ペティグルー。

「なかなか楽しかった」

「あら！」ちよつと声が弱まります。

「彼女たちも俺といて楽しかったはずだ」

「そうでしょうとも」さらに声がかぼそくなります。

「だが、結婚したいと思ったことはない」

「そうですの」

「だが、デリシアだ。彼女は違う」

「もちろんですわ」

「結婚は真剣なものだ」

「その通り」

「デリシアはろくでもない小悪魔で、時々、生きたまま皮をはいでやりたい気がするくらいだ。ちよつと痛めつけて躰をしてやったほうがいいのは見りゃ分かる。そうする権利があるのは俺だけなんだ。それなのに、もしデリシアが本気でイエスと言って結婚すれば、ぜったいその男に誠を尽くすだろうという気がする。他の女のときはそんな気がしたことは一度もない」

「中流階級の家で育ったんですもの、道徳心があるのよ」とミス・ラフォースがまた口を挟みました。自分についてのこの興味深い会話に加わりたくてしかたありません。

「結婚となったら、女ってどつしてだか、子供の頃に教えられたことが抜けないものよ」「君は口を出すな」とマイケルが厳しく言いました。

「あら！」ミス・ラフォースはまた小さくなりました。「ごめんなさい」

「悪いと思つなら態度で示せよ」

そう言つと、またミス・ペティグルーの方を向きました。ミス・ペティグルーはといえば、頭はぐるぐる、胸はどきどきのありさまです。

「あんたはデリシアの親友だろ？」

「ええ」ミス・ペティグルーは大嘘をつきました。

「それじゃ、馬鹿なまねはやめて、彼女にふさわしいのは、黒髪を油ぎとぎにしたナイフ投げのラテン野郎じゃなく、この俺だと言ってやってくれ。俺の目はふしあなじやないぞ」

「あの人はラテン野郎なんかじゃないわ」とミス・ラフォースは怒って言いました。「この形容がふさわしくないっていうなら」とマイケルは平然と言いました。「誰のことを話してるのか、なぜ分かるんだ？」

「あなた……あなただったら……」かっとなったミス・ラフォースは中途半端に口走りしました。

「あいつのひいひいじいさんはイタリア人だ。血は争えないよ。デリシア、俺をだまそうたってそうはいかない」

マイケルは飛び上がると、恐ろしい顔であたりを見回しました。

「あのくそつたれのカルダレッリまがいは今日、ここに来たのか？ あいつの臭いは――マイル先からかぎわけられるぞ」

「あたくしがいる間だけですわ」とミス・ペティグルーは大慌てで言いました。カルダレッリはニツクに違いありません。

「ハ！ それじゃあんたもあいつに会ったんだな？」

「はい」

「とんでもないくわせものだろう」

「その通り」

「女を泣かせる奴だ」

「まさに」と不実にもミス・ペティグルーは同意しました。ニツクの暗い、情熱的な眼差しを思い出し、どきどきする胸を押さえつけます。

「レディにはふさわしくない」

「あたし、レディじゃないもの」とミス・ラフォースは向きになって割り込みました。「確かにな」とマイケル。「君はレディじゃない。俺だってレディはごめんだ。間違った言葉を使った。謝る」

「分かったわ」とミス・ラフォースは胸を張って言いました。

「どんな女にもふさわしくない」とマイケルはひどいことを言います。

「近寄らないほうが安全ですわ」とミス・ペティグルー。

「あいつを見て何を連想する？」

「アイスクリームです」とミス・ペティグルー。

「何だって？」とマイケル。面白そうに顔を輝かせます。「あんた」と声をあげました。「鋭いなあ。俺が考えつくのはあいつが安っぽい映画で安っぽいセニョリータに安っぽい詩を歌い上げるところくらいだ」

（まあ、ニツクがそれをやったらさぞ素敵でしょうに！）とミス・ペティグルーは内心で切なくなりました。

「アイスクリーム」マイケルはわが意を得たりと繰り返します。「ぴったりだ。カルダレッリのアイスクリーム。まさに完璧」

くるりとミス・ラフォースを振り返ります。

「ハ！」マイケルは勝ち誇って言います。「カルダレッリのアイスクリーム。君はこの俺よりもアイスクリーム売りの息子がいいって言うんだ」

「なんてひどいことを！」ミス・ラフォースが怒ります。「ニックのお父さんはアイスクリーム売りだったことなんてないわ。知ってるくせに。それにあなたのお父さんは魚を売ってたんじゃないの」

「魚！」

マイケルは勢いよく立ち上がりました。大演説の始まりです。部屋を大股で行ったりきたり、ミス・ペティグルーは椅子や飾り物を心配そうに眺めます。

「君は魚と……アイスクリームを比べるっていうのか」マイケルは怒鳴ります。「魚にはリンが含まれている。魚は脳にいいんだぞ。魚は栄養だ。身体を作るんだ。ビタミンも含まれている。肝油だつてとれる。魚を食べば、骨ばっかりの赤ん坊も大きく健康に育つ。男たちは魚のために命を落とすんだぞ。女たちは泣き、港の酒場は悲嘆に暮れるんだ。その魚を……アイスクリームと比較するっていうのか。しかもこの俺に面と向かって」

「まあどうしましょう」とミス・ラフォースは息を詰まらせます。「マイケル。落ち着いて」

マイケルは振り返るとにやりと笑いました。

「大丈夫。これ以上思いつけないからな。下剤のヒマシ油は魚からとれないはずだ。だつたらもつとどぎつい効果があつたらうが」

ミス・ペティグルーは顔を赤らめ、急いで横を向きました。ミス・ラフォースの目が時計に留まります。

マイケルはその合図にピンとききました。

「今晚は予定があるんだな？」

「《深紅の孔雀》で歌つた」

「観に行くよ」

「来てとは言わなかったわ」

「向こうで会おう。別の女性とブーツがあるが、キャンセルする。虚勢を張りたくてね。あまり賢いやり方じゃないし、普通ならそんなことしないんだが、緊急時には思い切った手段をとらなくちゃならん。俺にほれさせるのに一週間しかないんだつたら、今すぐはじめないとな」

マイケルは帽子と手袋とスカーフをばたばたと集めると、こちらに来てミス・ラフォースにキスしました。ミス・ペティグルーは自分のことのように嬉しそうに見つめます。と、彼の顔が真面目になりました。

「こんどは冗談事じゃないぞ」と静かに言いました。

ミス・ラフォースは息を止めました。

「分かってるわ」

マイケルは戻ってきてミス・ペティグルーに大きな音を立ててキスしました。ミス・ペティグルーはマイケルが出て行ったのが分かりませんでした。幸せで眩暈がして息もできずに椅子に寄りかかっています。ドアが大きな音を立てて閉まりました。